繪本太閤記

四編

一

特
へ 伊 13
1833
37

昔者豐公之霸也一匡天
下濟世安民澤被後世不
亦大手粤有公之本傳幾
許卷藏于某家久[illegible]書

特へ13
1833
37

也蓋代勳績奇謀秘策粲然可觀矣寛政丁巳歳始鋟于梓加之以圖畫形勢如指掌三篇先成行于世焉毎篇有序天正壬午歳自一擧誅逆徒至于陷長濵城勤為第四篇今刻成書肆某請序于余固辭不聽故題于卷首以塞其譴耳

寛政十一年己未春[illegible]月

方廣王室侍臣
南紀藤白太神六十八世裔
鈴木求馬穗積重巽

繪本太閤記巳篇　總目録

壹之巻

光秀京都ゟ旗を立る圖
三法師秀信卿之圖
毛利家兩川仁義秀吉與加勢一話
秀吉の陣中騒動の圖
秀吉尼崎危難之話
秀吉大黒天の像を破捨る圖
秀吉尼が崎危難の圖

仁王天但馬守勇力の圖
加藤清正討仁王天話
秀吉栖賢寺にて剃髪し急難を免れ給ふ圖
加藤虎之助武勇の圖
加藤清正仁王天を討圖
後藤又兵衛智惟任が勢を殺す圖
明石儀太夫遁れて京都に帰る圖

弐之巻

栖賢寺廣徳寺賜寺領話
秀吉剃髪して諸将に見え給ふ圖
和尚景首座秀吉卿に謁する圖
嶋左近破尼崎陣話
嶋左近長刀揮ふの圖
百姓太郎兵献策話
明石儀太夫赤堀にて淀の城へ帰る圖
百姓太郎兵籠城兵を欺く圖
池田高山先鋒を争ふ圖
羽柴惟任山崎合戦話
光秀本陣之圖
斎藤内蔵介諫言光秀話

斎藤内蔵助洞ヶ峠筒井が陣を遠見する圖
斎藤内蔵助光秀に諫言の圖

三之巻

秀吉堀尾吉晴に命じて天王山を取らしむる圖
秀吉光秀天王山を争ふ圖
京都の町人等光秀に酒菓を献ずる圖
光秀角黍の皮を去らずして食ふ圖
甘利八郎兵衛大言の圖
山崎大合戦之圖
斎藤大八郎柴田源左衛門兵を伏て大和勢を討圖

四之巻

柴田源左衛門血戦の圖
斎藤大八郎討死の圖
光秀山崎を敗走する圖
藤田傳五郎郎等に諫られ山崎を引去る圖
藤田傳五郎自殺の圖
斎藤内蔵助勇戦の圖
明智十郎左衛門討死の圖
味方の勇士等東方の高山村上を斬圖
信孝中河瀬兵衛が大功を謝する圖

秀吉光秀争天王山話
山﨑合戦之話
筒井順慶裏切光秀陣話
光秀敗軍之話
惟任方勇士等討死之話

五之巻

光秀落命於小栗栖野話
三宅藤兵衛光秀が生害を止る圖
一揆原落人を討んと戦ふ圖
中村長兵衛闇に光秀を突く圖
光秀小栗栖にて落命の圖
光秀病死并ニ治右衛門光忠自害話
溝尾庄兵衛自殺の圖
中村長兵衛光秀主従の首を秀吉卿に献る圖
明智左馬之助打出浜合戦之話
林半四郎勇戦討死の圖
左馬之助馬にて湖水を渉る圖
左馬之助馬而渉湖水話

六之巻

左馬之助唐崎より坂本の城に入る圖

明智左馬介入江長兵衛ニ與黄金話
光秀が妻室令して家人を去しむる圖
光秀が家人坂本を出て離散の圖
明智左馬介入江長兵衛に黄金を与ふる圖
明智左馬介狩して白狐を獲る圖
入江小七郎足利家より召さるゝ圖
入江小七郎足利の御家人となる圖
入江左閑庵に高名聞ゆる圖
狐妖人を誑す圖
入江長兵衛再不覚を蒙る圖

明智左馬介狐を捕ふる圖

七之巻

明智左馬介生害之話
明智左馬介宝器を秀吉卿に呈する圖
坂本落城の圖
妻木主計難風に逢ふ圖
荒木山城守剃髪の圖
斎藤内蔵介馬を奪て堅田に走る圖
斎藤内蔵介堅田の浦に乳母が家に隠る圖
斎藤内蔵介被誅話

堀尾茂助吉晴敵茂内兵衛を生捕圖
石田三成内兵衛を服さる圖
小田家の士達坊居會清別話
六段念佛の由来
秀吉光福寺に千葉三の号を賜る圖
紹巴法橋智を以て縲紲を免る圖
秀吉參内之圖

八之巻

柴田勝家小國亂入之話
羽柴筑前守三法師君に謁する圖
柴田勝家魚津の城を責る圖
長尾宮内柴田右近を討圖
河田豊前守勇戦して魚津の城に入圖
上杉景勝自為打候話
上杉景勝柴田が陣中へ矢文を送る圖
倉田左吾兵衛松本外記高井隼人口刑部惡力戦の圖
瀧川森亂入三國徐太田切話
三國徐合戦の圖
喜佐川合戦の圖
森勝蔵太田切破上杉勝話

同圖
信連が事

九之巻

魚津落城之話
魚津の城兵柴田が人質を殺して生害する圖
勝家軍を返して上杉勢と戦ふ圖

上杉勢追討柴田勝家之話
一揆原勝家が上洛を支る圖

森勝蔵長一上洛之話
森長一人質を殺して上洛を企る圖

宮内府女京都の變を安中に告て勢州に注る圖
信雄悔心をもつて宮内府女を伐しむる圖

小田家旧臣等禅定御遺蹤話
坂氏の女勢田の神司国本が宅にて信孝を産む圖
吉郎右衛門三七君御誕生を信長公に言上の圖
佐久間玄蕃秀吉を拒む圖

十之巻

小田家幼君国郡配分話
瀧川一益神戸川にて小泉と戦ふ圖
瀧川左近軍中に猿楽を見る圖

柴田勝家盛宴て秀吉に酒を飲しむ圖
筒井順慶へ駿馬金帛を賜ふ圖
秀吉忠言令感諸老臣話
柴田勝家秀吉を恥しめんと計る圖
光明皇后の故事
佐久間玄蕃既為害秀吉話
柴田勝家佐久間盛政に命じて秀吉を討んと欲る圖
佐久間玄蕃秀吉を害せんとする圖
秀吉智計勝家盛政が手術を挫く圖
本能寺退福速疑

十一之巻
秀吉本能寺へ米銭を寄附の圖
秀吉紫野大徳寺に営葬礼話
秀吉諸方へ使者を差る圖
柴田勝家再び上洛の圖
上杉景勝評議の圖
諸國の大小名京都輻輳の圖
小田家旧臣饒秀争順列話
勝須賀錦雄大谷作る田仙石等
旧方に兵を伏せ相謀を待圖

秀吉紫野大徳寺に葬礼をいとなむ圖

焼香之圖

秀吉の伏兵四方に起て大徳寺を囲む圖

十二之巻

瀧川一益會小田旧居話

目

圖

山崎寺又探居の圖

瀧川一益計策和柴田羽柴話

摩恵多不破金森陣中秀吉に使する圖

柴田羽柴和睦の圖

秀吉長濱城話

柴田伊賀守秀吉に降る圖

秀吉民屋に放火して岐阜の城を囲む圖

秀吉安土に幼君に謁する圖

天正十一年元旦之話

宝寺の陣中大三十日の圖

諸國の武士姫路の城へ新年の

秀吉を賀する圖

總目録終

繪本太閤記己篇巻之七

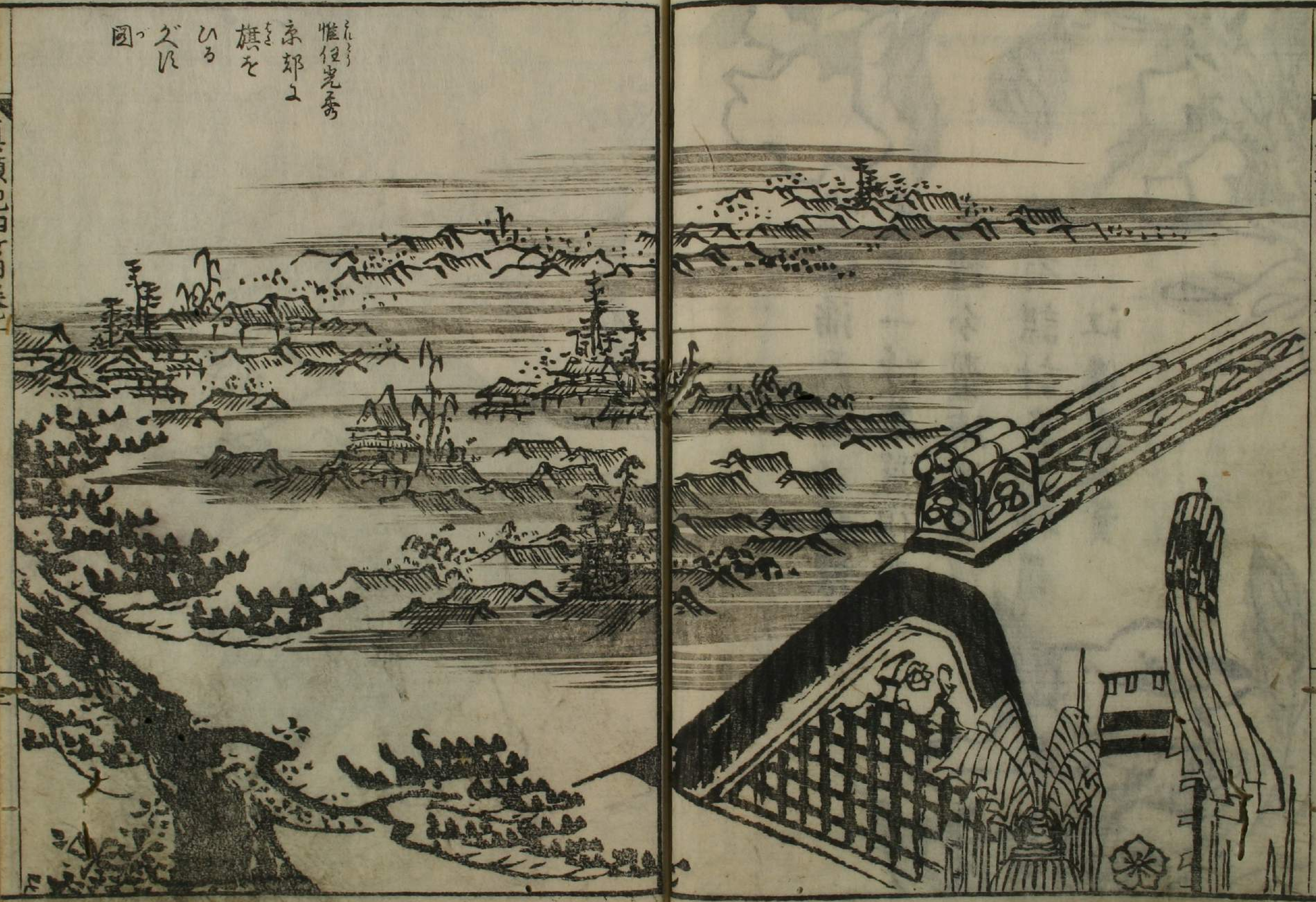
目録

光秀京都に旗を立る圖
三法師秀信卿の圖
毛利家の両川仁義秀吉与㆓加勢㆒話
秀吉の陣中騒動の圖
秀吉尼崎危難之話
秀吉大黒天の像を破捨る圖

秀吉尼が諭りて危難の圖
仁王天但馬守勇力の圖
加藤清正討二仁王天一話
秀吉誓願寺にて剃髪し急難を免逃るゝ圖
加藤虎之助武勇の圖
加藤清正仁王天を討圖
後藤又兵衛智惟任が勢を殺る圖
明石儀太夫遁走て京都へ帰る圖

惟任滔天窮極猖悖
義軍一呼熊羆倶發
支體分裂城池燬没
雖有謀計安免神罰
江溝逸人賛

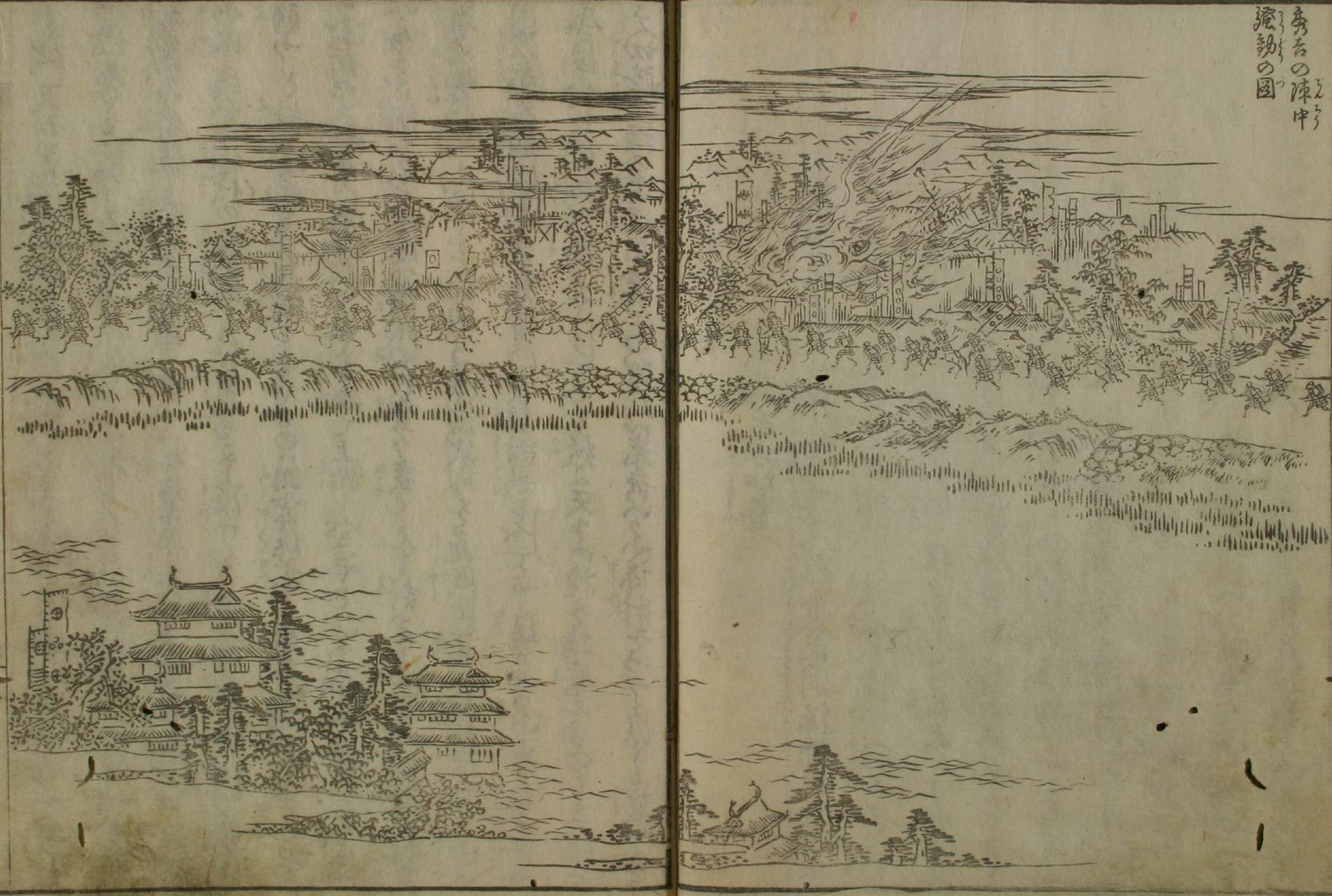
惟任光秀京都に旗をひるがへす図



繪本太閤記四篇巻之壱

毛利家之両川仁義秀吉に加勢

惟天監人善悪必應善莫大於忠悪莫大於不忠忠則福禄至焉不忠則刑罰加焉故に君子の忠ある家ハ需めずして福禄を得小人の不忠と兼るハ自刑罰を受る不謂禍福ハ門なし唯人の自招く者之と宜なる哉天正十年六月二日惟任日向守光秀京都本能寺二条室町の城に押よせ安々と討奉り年来の積欝を一時に散じ妙心寺まで引退けるがそらく心に思ひける中にも此時神戸三七信孝並角五郎左衛門ハ四国誅伐のため難波三津浦に兵船を催し風の手を待て発せんとす其上小田七兵衛尉信澄ハ光秀が聟にして亦も信長公を父の仇なりと怨まいらせ惟任が二の味方なれバ神戸角を押へ討んと難からん丹後の国主細川与八郎忠沖もいく光秀が聟なれバ是もまた一旅の助け



秀吉の陣中騒動の図

ならしべ大和の太守筒井順慶は兼て断金の交り深く其上光秀が陰謀を知て
一国一城の主となりし程の者なれば味方に招くとならば細かなり其外柴田勝家は
恵多年家佐々成政等も小国に向ひ上杉景勝と対戦し滝川一益は
小条氏政を征伐の為関東に赴きし容易に上洛せん事叶ふべくもなし中川信雄は守
弱なれば計るに足らず只恐るべきものは羽柴筑前守秀吉一人なれども是も
又毛利の大敵を受てあれば如何んぞ打捨て上洛をなすべきやさらば心利たる秀吉なれば
いかゞする事を察して中国の将をぬけ登り来らんも計り難しまんいち彼者を討て
近き摂州の退くにしかずとて即時に森田何八郎を飛脚とし吉川駿河守元春小早
川隆景へ委細を告て秀吉を中にて籠攻に討果さんと申遣しけるが秀吉元来
尾張中村の土人筑阿弥が子なりしかども終に天下の権を握るのみならず三韓を
も切従へし程の器量ある者なれば光秀が小謀計をめぐらすとも豈此人を

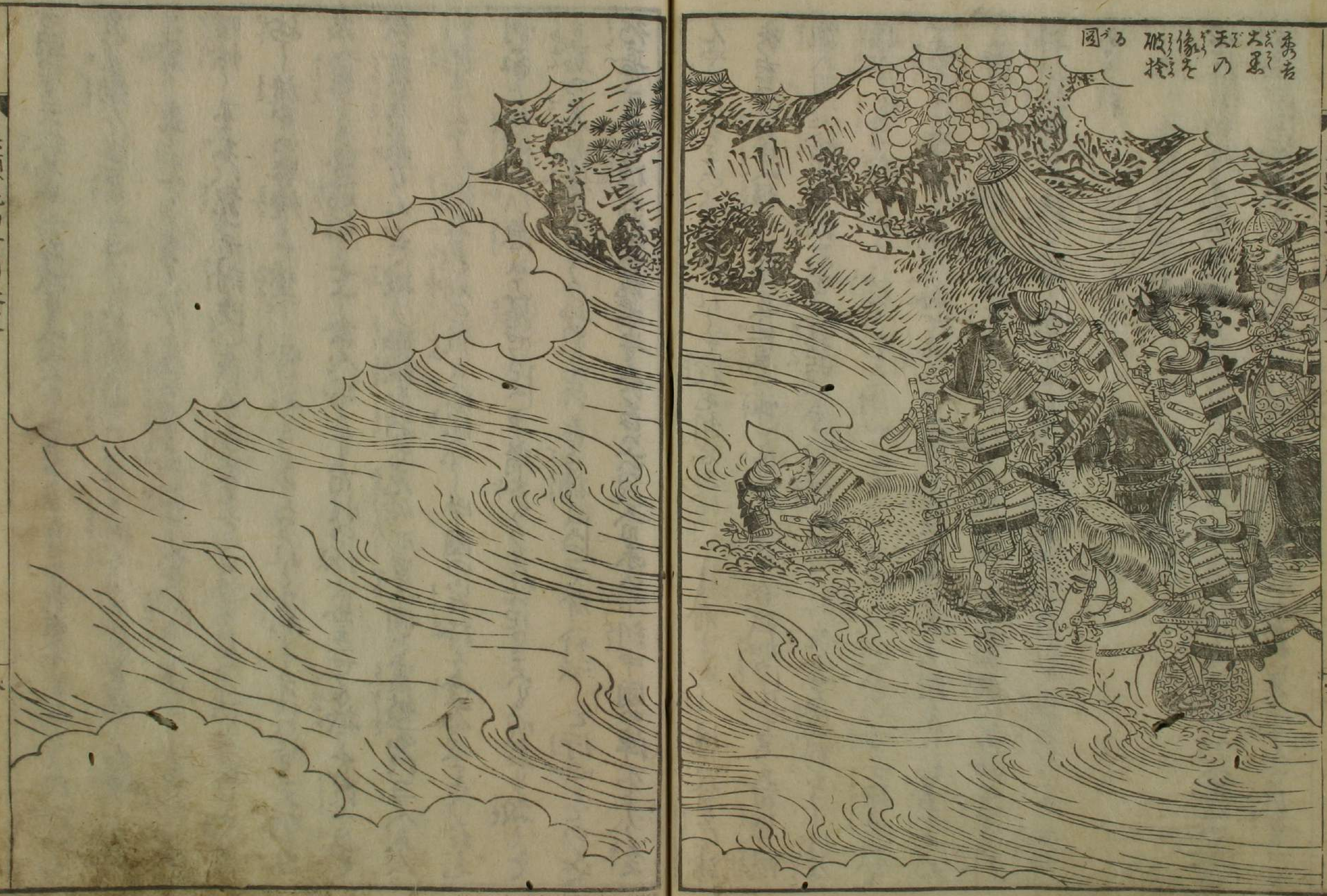
討つ計さんや忽天の加護ありて此飛脚を搦め捕信長公の大変をよく知り安国
寺恵瓊をもつて和睦をなし結び両家の誓書調ふや否只一騎都をさして登
る人は数万の軍兵只たゞ是に追れて行と定めつるゆゑ上を下へと
発動し思ひ〳〵心々に上方をさして馳上る程こそあれ雑兵の宿りし小屋に火付
て焼ければいや火よとひしめきてやらんかたなく火を打消ぬれども周章
狼狽の余りに浮足立て陣をも打捨て刀馬武具旗幕の類を捨
てるまゝに打集る人もなく押合ひ踏合ひ馳るまでに左右の武器を拾ひ集め
て卒に徳付ぬとて悦びあへり此時元来隆景は秀吉の陣中発動せるを
知り追て思ひ寄る摂州阿賀の一向宗の坊主体巴が許より信長切腹のよし告
来れば紀州雑賀孫市本願寺に従ひ中国の僧侶まで追々信長へ
変ありと進撫の歯を打ならし附て国統をきる事を出て申たる信長

惟任が為に弑せられ秀吉都へ逆よりは叛将も命のびまじ追討せらるゝ以へ
其節御先を仕り秀吉をたすけて討留め京都に攻上り光秀を退天下
に旗を挙られ以へ是毛利家へ天よりも賜ふ福勝貴利来りしと勧め申せば諸将
皆是に同じく今此時を失ひ給ふものならば却て禍を来り給ふべしと衆口同音
く諫めけれど隆景元春既を子細く陰ぎんにて申されけるは我々秀
吉と一旦和睦せんと誓詞文を以て約盟し未だ血墨も乾かざるに欲の為に
棄りて約を変ぜんは大将の恥る所且ハ上天の冥罰も恐るべし司馬法に曰
喪に加へず凶に因らずとされば楚の共王陳を伐し時陳の成公卒す其ハ哀公
若かりしかば楚王兵を罷て去り又春秋にも晋の士匄斉を侵し斉侯卒
しかば士匄伐ずして還りぬ君子ハ其喪を伐ざるを大とせしとこそ見へさ
是仁義を弁へん者ハ皆かくあるべし我々何ぞ其君の卒を幸として盟約を破

んや再び是をいふべからずとて毛利家右衛門が使者として同月八日尼が崎
秀吉の営中へ遣しめ信長逝去の悼を述今度弔合戦加力として弓百張鉄
炮百挺鎗百筋馬百疋精兵三千人を送らるれば秀吉大に感銘なりて厚
膳永く忘るべからずとて深く是を謝せられけるとぞ是ハ毛利家の勇士猛卒敵を
一言も申す者なく腕を扼て止りけるが心ある武士ハ微に元春隆景ハ仁義の大将
に相違なきと感ずる者多かりける扨吉川小早川の両将備前岩の陣を引
払ひ猿掛の本陣に来り照元にまみへて使節申述れて甚賞へてこそ帰陣
なされ

秀吉尼崎危難

惟任日向守光秀ハ羽柴筑前守を討んと吉川小早川の両将へ密使を遣
し観を通じ置ねども元来秀吉等閑の者ならねば猶心を安んぜず翌三日



秀吉大黒天の像を破捨る図

の軍は主天但馬守明石縫之丞は其人を招きて申けるは秀吉を毛利のために討せん
其手術を巡らさんと雖も彼猿冠者はいかなる計をめぐらし毛利と和睦し取回
に登り来らんもはかり難し汝等覚悟致す数十人を引率し秀吉が来るべき途に
埋伏し不意に起つて討取べし秀吉元来先を心に掛る者なれば大軍を後に
残し旅人の姿に変じて登るべし然らば易きなれと示し合せれば主天明石の
両人畏りて手勢勝ぐつて七十余人いづれも百姓の体に出立せ手拭にて顔を包み
或は菅笠蓑なんどを被り鋤鍬を持て尼崎西宮の間を窺ひ兼て三人五人
引別れ上下の往来旅人の動に余念なく中国の容体を窺ひ秀吉毛
利家と和睦に及び急に上洛せらるにと申者あらざれば主天も明石も頼みとぞ
主君の先見違ひさるはよもやと秀吉を手捕にして都へ引べしと行嚢をのぞ
待居たり去程に羽柴筑前守秀吉は六月五日未の下刻中国の陣営より走

馬に鞭打て馳上る後へは旗本の勇士加藤虎之助福島市松片桐助作加藤
孫一郎平野権平糟谷助右衛門脇坂甚内を始とし御供には朝野弥平
蜂須賀小六郎生駒甚兵衛大谷紀之介松井与四郎戸田左衛門仙石権兵衛等究
勢をかけ連て揉に揉んで登りける
去程に天正十年六月二日惟任日向守光秀は信長を弑して秀吉備中
あるを知り其先を欲毛利家と和睦調へ備姫路に帰り一日馬を休
めて京都へ責上らんとて川を渡る砌川上より木佛流れ来る馬副是
を見上るを秀吉見て何佛ぞと問るに大黒天なりと答ふ秀吉其大黒
を取て鞍の前輪に押しあて縫刀を抜て二つに切割大黒は只一人をと思ひ
む佛なりと定めば門出にいひて捨らるれば我此時既に天下を取らんと思ひ
ありしと云は先に蕎人吉岡紀伊より秀吉へまだ松下加兵衛が家来

秀吉危殆(あやぶきこと)して危難(きなん)の図

眞顯記初編巻之一

けり其時三面の大黒天を打碎きつるハいづれも是なりしや秀吉一生のうち
大黒天を打破りし事度々なりしや彼後人の議論を俟
秀吉此時も早く都へ上り主君の御讐を報ぜんと宿所にて
馬を乗替急ぎ馳られけれバ諸率我おくれじと急ぎつゝ跡を逐
御馬に付従ひ旗本の面々ハ皆馬を乗捨て歩行立になりて走る程
に又廿七町隔たりし西の宮の驛より兵一人にて馳られたる家に羽柴の
旗下なる勘兵衛に辞し後藤将監基国が子又兵衛基次此時年長じて
廿一歳生得惣明叢莉にて武術兵術群を抜て世に希なる者なれバ
勘兵衛も深く愛しよくなる者と共に往ひしに此時又兵衛主人に向ひ申しける兵
庫よりの上ハ摂津の地にて敵地に近し今羽柴殿諸率と別れ一騎にて弔ひ合
戦を営んと只一人先に離れて進み給へハ流石にて未退く猟師と共に於て(?)

と危ぶめども大要を思ふ時ハ余の事を看ざるの誤りなきにあらじ若光秀
兵を伏て是を待バ大ぬ羽柴殿の御身の上甚危し若馬武者なれて秀吉殿
に馳付参らせん時助け参らせバ援群の大功此とやあるべきと勧めければ又兵衛も
と心付諸馬の兵五十余騎中にも後藤又兵衛基次可児才蔵吉長先にて馬を
飛し進立つゝいそぎける程も秀吉ハよく馬を馳らせ尼崎へ急ぎ給ふ
甚だ諸に百姓ども七八人或ハ三四人鋤鍬を取て土を運び草を刈退けるの
道作せる体なれバ秀吉馬上より大音にて汝ある百姓ども寺社にも道を作
るもの哉我ハ羽柴筑前守秀吉也今都へ馳上り主君の弔ひ合戦し光秀を討
亡し程なく又畿内を穏ならしめ後年にも課役をゆるすべし我軍勢追々後から
来るなるの縁路を急ぐべしとよびて捨て馬を早め向ふを越さんと給ふ幾
群となくはじめ体なる百姓ども悉く鋤鍬を打捨てくるを作るの横目ハ歎

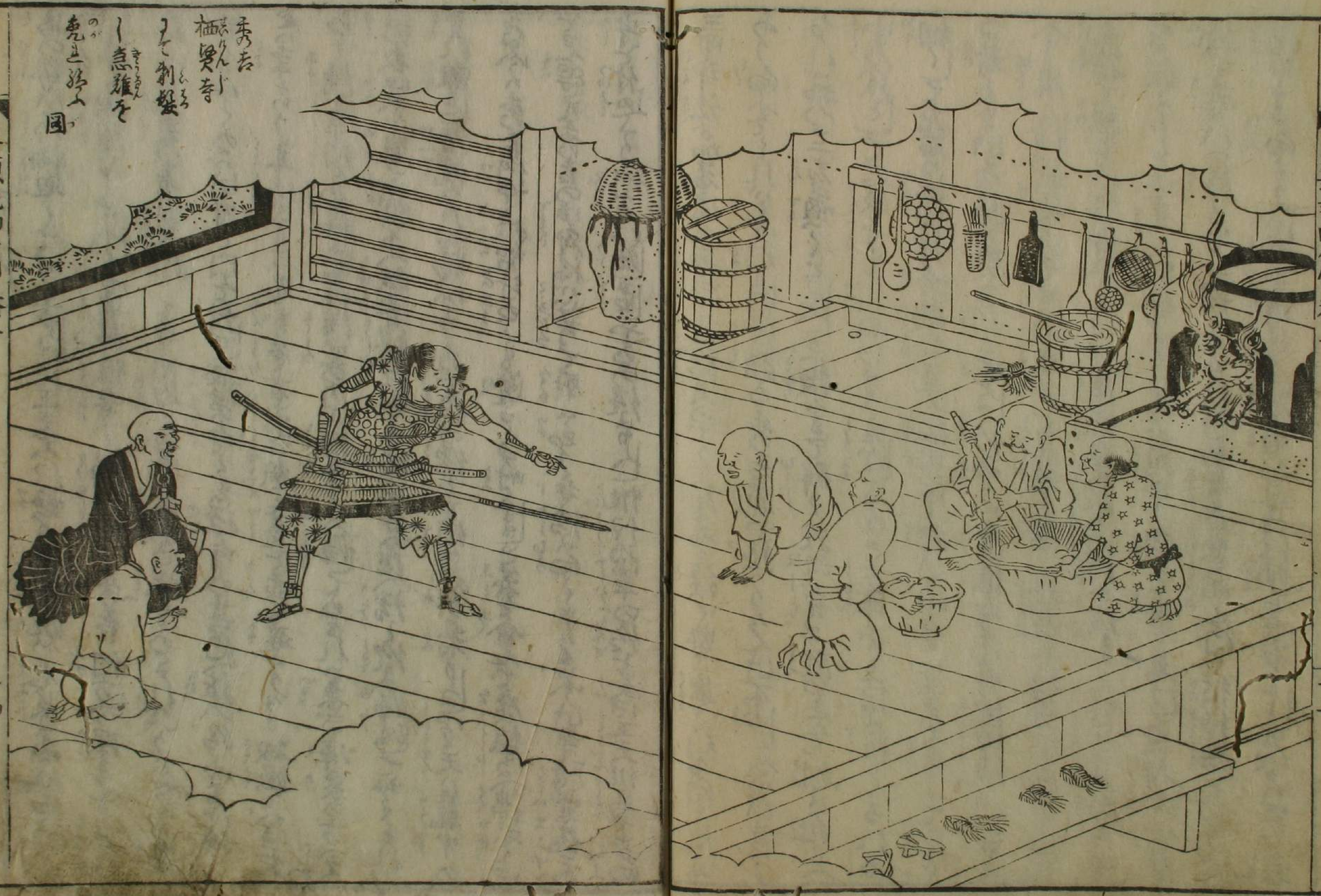
仁王天
但馬守
勇力の図

方の間者なりんと馬を止めて扣へ給ふ処にいづくよりか螺貝の音一声の返事もなく往
こそあれ紺の母衣かけし二面の騎武者秀吉公を追来りて最早具足の仕廻して鎗と云
まる者ぞ嗚呼かゝる羽柴秀吉西国の和睦調ひ一騎駈にてよるべき様なし怪しき
輩とて先を塞ぎ給ひ仁王天但馬守明石縫殿之丞人々と云く此所にて待
る事既に久しとてやにはに敵を縮るなりと鎗の穂先をそろへ並べ仁方より詰寄
は危かりける次第なり

加藤清正討仁王天

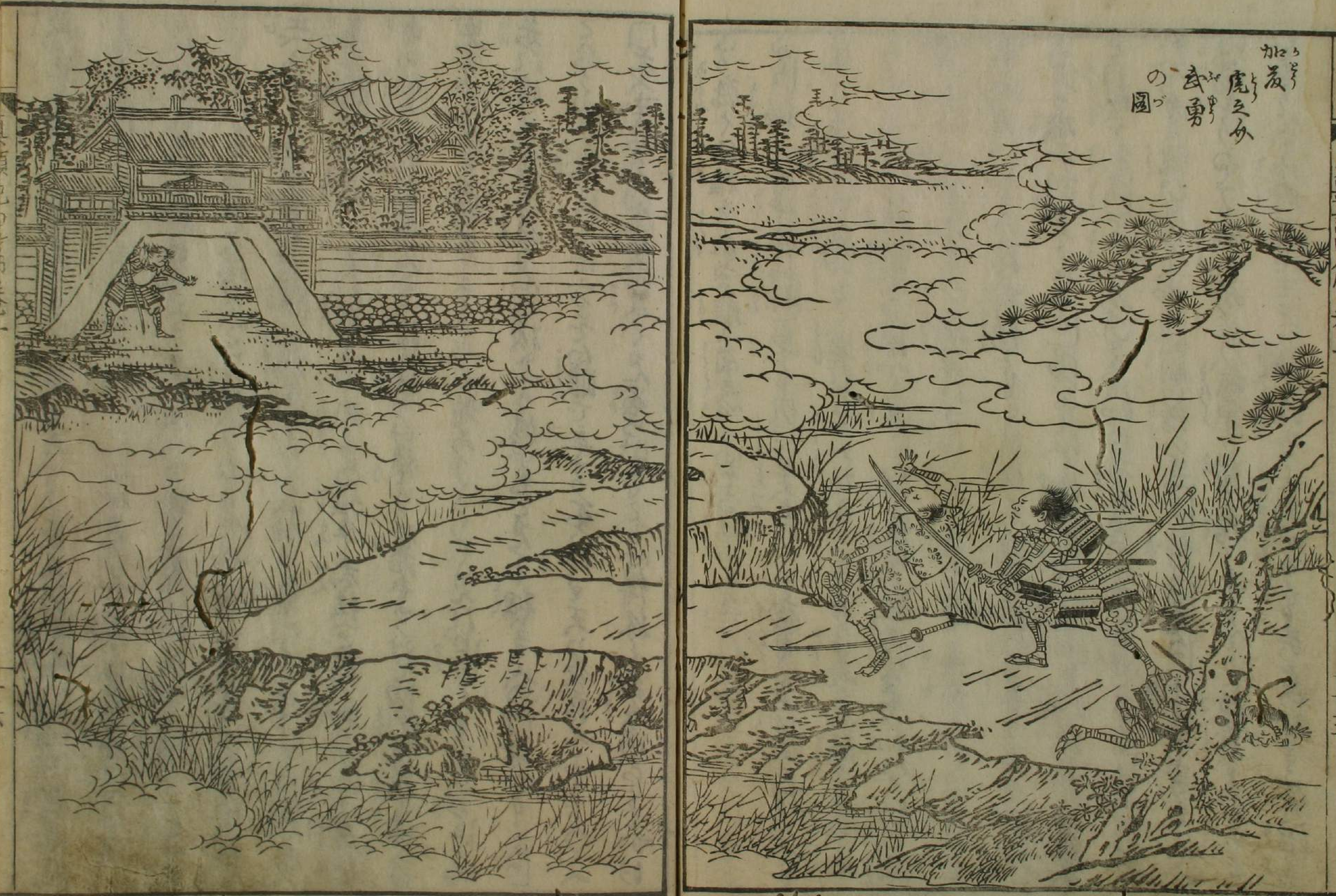
名将猛士と云ふべき者雨燈の時は必危難を生ずるとかや光秀が計略
図に当り仁王天但馬守明石縫殿之丞の勇士七十余人の強兵を下知して四方
を取囲み鎗ぶすまを作り喚て寄る只一人の敵なれば近寄て馬を突倒し
生捕にせよやとて一同に進む騎武者より此時秀吉跳跚たる後と自ら進で

三所斗蔵が加藤虎之助只一人韋駄天の如く近来る様く勢ひ道にも引向ひ給ひ
ありと向来るとみれば東へ別れし縦路の秀吉運や強かりけん此所に出し合ひまげる
かれば掛つる主馬嘆くと見えしが一瞬を経て群がる兵士等が敵の上を一刎に飛こえ
小路を走て三間斗も飛ぬけたり遂に走りつゝ士卒共も一同に追かくるに左
細にして左右は深田神合踏合二三人深田の中へ飛び落ると仁王天大に怒りて急ぐ
る者共も此所は狭し迚べき別も存ぜし所で有りは廣徳寺左右は深田後ろの門は袋に
入嵐に似し戦追かけて生捕来らん青ば続く兵を此所にて防ぐ処と
云捨て駈出る秀の吉は去んて法廣徳寺へ駈入門内か後を見れば仁王天但馬守
のがれまじと追来る即智の大将馬を飛越り遭を見て来りし加へ押迫り刀を
抜て屍ひの様りと二つ打切りければ此馬驚き忽飛上り彼纏語を一文字に
駈行ら向ふより仁王天追来る一筋道なれば馬は蹄をもて左へかはせど


秀吉栖巌寺にて剃髪
し患難を
免れ給ふ圖

馬の勢ひ為に道狭くてせん方なく仁王天王に與り身を沈め宛も無きにとうけ
引組て深田の中へ二人共ども転び込み広徳寺へ逃行けり秀吉は何方へか隠れんと思ひ
然るに元来此寺無縁にして寺内迫く身を忍ぶべき隈もなければハせんこと叢を
出て見れば此寺と門を對せし摠見寺とて是は寺の甚へ近くに広徳寺の
是は来らぬ年経ぬといへども本堂客殿に甍を並べて建ちたり椒須べきこそや
あさとに侍るとき門で見給ふに南に浴室の内に侍ぶ三人へ湯して居たれば急ぎ庫裏の方へ立
行衣装を脱で縁の下へ投込丸裸になりて彼風呂へ這入湯の中
里て離れし浮浪れば物なくらぬ雲水の僧ども何とも寄る者はなし秀吉は籠中の
名今は秀吉何やらぬ智計なとも遁るゝ所はなしと案を合んで広徳寺へ
とかく毎度秀吉の法衲様は心静かで厨よりそ寺僧と向く中る今は寺へ
守と付込り何方に隠れしやるの僧は中に惟任郡の僧と突に仁王天へ往馬する

より漸く後雑を紅るを眼に蘭立ち居るに寄る侍共大いに怒れ左様の人有て此寺へ来
るは思ぶくば寺中不残操し出しとや仁方天云うやなぶ秋月は直ちに追返しと探出して見ん
とて本堂客殿なく逃れ不思議なる秀吉は法衲きん藤の寺とや逃さ
らんと心付て彼栖覚寺へ馳せ付て隈なく探せ廻らん元文にゐこ知れば心
得ども外に逃る所もなく翔されば飛で去べき様もなしと庭前のごとくに紛れ廻る秀
吉は風呂に隠れ居る侍共内僧ども皆湯より揚り呂揚り先より見附逃れ様
なる砥石剃刀を取り押へし湯の中にて濡るる髪を掻上剃信長公の追捕
を自髪を剃落して全く坊主の如く着衣を取り揃へてより向きゆる
なる身に纏ひ甚だ出て他国の僧の妻りし体よりて下僧下男などの
味噌すりする侍に居より秋中も揚り揚りやらんとて板敷のよにくこそ
ともりてぞ法衲なる仁王天は濁く殊なく弱来ども秀吉のおもきが浴室


加藤虎之介武勇の圖

及び甚處も三度来り立向ふ迄でも秀吉の刺殺し味方の猛る居給ひしとハ神なら我身のつゞき知らん此時加藤清正ハ遥に君の急難を見てされバ宙に飛で跡来り大太刀引抜ける物をも薙伏切伏呪と侍を見れハ此せども主人秀吉ハ刀へ給ひしに揺ハぐらせ給ひしが火の中よりたまえ得で止べき中に日比の勇気百倍して猛虎のごとく怒り狂まつく内に十余人纂を跳して切倒せり然に其まゝ數多の強卒前後へ一門と逃たりしが廣徳寺の細川が近習若一人あり清正追うけ後より袈裟にかけて切倒せバ左の肩田へどふと倒る其田の中よりごめく者あり よくく見れバ近く主君の首旦馬来ル深く息も絶なんの模なり清正是を見て扨ハ主人の御身心もとなしこれハふせん浅ましと仁王立に白眼で立たる所に天ハ秀吉を求めたまひ又門前へ出来る虎之助まくり見えにけり寺こそ心得祢と飛行のごとくかけ

来り支なるハ光秀が臣に四天但馬守よ我主人の御座なるにやと安らく答へハ但馬守も日比加藤が武勇ハ知たり此奴討とんバ秀吉ハ探し難しと大音よて欺きけるハ惟任将軍の命と云又其者を此所に埋伏し統前守を某が討取る由も早く刀をなけ冥途へ対面せよと電光のごとく切て懸れハ虎之助も血刀を振て左右前後と飛かふ切込で虎狼の飛るの身を逸し潜く附を狼しけるがかくてハ果じと但ざ組んと両人一度に太刀投捨引寄せて互に組むとも中ゆる大力踏ため足を大地を蹴しよあゆり下にあゆり死力を出し揉合しが加藤が力や勝けん終に但馬守を下に組敷腕を折て縄を掛んとせし時に四天が子より出かけ是ハ情なし虎之助縄を容して速よ首を刎よ虎之助ハ笑ひて抑の身ハ我君を奪ひし者其を欺くよし匹夫のよハ寄くと討ち給ふ

加藤清正
四王天を
討圖

ねならしバ汝を生捕拷問して君の行衛を知るぞと先触を云せしかバ付て
縄を急ぎ寓に捕ひくに已に天再起て仰る所へ紺着漂れ朝石稽山の戦
破し節本の中に隠れし危急の難を遁しとや其より今は寺へ秀吉が捕ひ
迎寺中といふに捜せども更に秀吉の行末知れしハ我宴に討捕せるが首
をもって為べきやうる運の秀吉寺中に隠れ居給ふにお遠ひしとて人ども
急なりける人の目より曽て見ん人ハ我主人光秀の名誉に害るとて人ども
かくのごとく討もらしぬるより光秀公の運命も党来ひし武士の情れのひ豆
そで縄目の恥辱を免しまく首が切ひへて勇者の一言清正も哀を催し腰刀
引ぬきたんるく首を討落し寺内をさして馳入る尚此時明石儀左
ハ本方にありて猶よう来る羽柴を防んと士卒を下知して控へし所へ
其田勘兵衛が乗る諸馬の武者又十余騎後藤又兵衛毛利吉兵衛基相着

真先に砂烟を立て馳来り扨こそ羽柴家の急難ござんなれと当るを幸ひ
切て廻る程に其勢ひ諸馬武者うて出る行立の惟任勢さん〳〵に打なけ立
ら〳〵と四度路に敗くる所に追て馳来る羽柴の同勢猪隈行切涌坂
糟谷をはじめとし援連て切てかゝれバ明石儀太夫勇を震ふて戦ふといへども今
を敵射叶がたく切ひらく逃行を追討に其身が手に討る首二十三突に
後藤が先に言遠ひして秀吉の危急を救ひ其身も亦立身の基とぞなりし此戦
神戸信孝並に角田又郎左衛門なる秀吉と計議をなし信長公の弔合戦を
営んとて皆く尼崎まで出張し今日七日秀吉当地に着陣の旨きのふ沼
進られしバ中川勢手なる山右近高人三百余騎秀吉を迎ひの為に来りまく
来りしに明石儀太夫が迎来るに行合ると塞ひで左まれ〳〵バ討捨られ
ら尚惟任勢今ハ是までとや思ひけん踏込く捗り〳〵に討戦ふて皆討死と

後藤又兵衛智
惟任が勢を殺る図

さる程に明石儀太夫ハ擧して敵を切ぬけ阿閉氏が秀吉を討洩し忍ひのにと廣徳寺へ馳行けれバ門弟に阿閉天が屍靈に深く側より勇士三方今ま我も此寺中にて切腹せんとせし所へ半里へ馳入りしが漸く味方の兵二人を活着なく光秀が云ひ置きし着たれ八秀吉に不意を討ちたりけれ共討ち漏らし先家を逃れ出此事を主君の方に告げし其後に生害をとげしとぞ身の不首尾をも哀れを脱捨て裸になり田の中を渉り泥にまみれて逃れ去りぬ

繪本太閤記七篇巻之十終